

私のおススメの本

田中菜採 専任講師
(英語)

『タイムライン (上・下)』 マイクル・クライトン著

早川書房 2000年

この本は世界的に有名な映画『ジュラシック・パーク』の原作者であるマイクル・クライトンが書いたSF小説で、いわゆる「タイムトラベルもの」です。

歴史学を専門とするアメリカの大学の教授や学生らが、14世紀のフランスの遺跡を発掘するプロジェクトに参加していたところ、どう考えても不可解なことが起こります。教授はスポンサーの会社に呼ばれて不在で、なかなか帰ってこない... 遺跡ではなぜか教授が14世紀から助けを求めるメッセージが... 残された学生、大学院生が教授を救うために会社に押しかけると、本作のタイムマシンである「タイムライン」が知られざるテクノロジーを使ってひそかに完成しており、その恐ろしい弊害も明らかになっていきます。現在に残って「タイムライン」を保守するグループと、過去に向かって教授を救出するグループにそれぞれ分かれるのですが、時間の経過とともに双方がトラブルに見舞われ、手に汗にぎる展開です。またグループのメンバーは歴史学の中でも得意な分野やスキルを持ち、お互いに助け合いますが、一瞬でもタイミングを逃すとメンバーの命が危ういという究極のチームプレーも非常にスリリングです。

「タイムトラベル」を扱う作品では、タイムマシンが存在している世界線で話が進んでいたり、よく分からないけど時空の亀裂(?)からたまたまタイムスリップできちゃった! という設定が多い気がします。それはそれで楽しいのですが、本作では現実の科学の理論を織り交ぜながらタイムマシンの仕組みを丁寧に説明されるので、本当にその内発明されてもおかしくないのではと思わせる説得力があります。「タイムライン」の技術は本作の出版当時には実現していなかった量子コンピューターを使うという前提で書かれているのですが、現在では徐々に量子コンピューターの実用化が進んでいるようで、ますます現実味を帯びてきました。このように小説を楽しんでいるだけかと思いきや、意外な豆知識がつまっていて、医師をしていた経歴を持つ作者の科学技術に対する造詣の深さを堪能できます。同じ題名で映画化もされているので、小説とはまた違った雰囲気を楽しめるとと思います。

『ミレニアム ドラゴン・タトゥーの女 (上・下)』 スティーグ・ラーソン著

早川書房 2011年

スウェーデンのジャーナリストであるスティーグ・ラーソンが執筆した小説で、タイトルにある『ミレニアム』という雑誌の編集者ミカエル・ブルムクヴィストが主人公です。ミカエルも著者と同じジャーナリストなので、主人公の活躍を通して、著者のジャーナリストとしての信条が垣間見ることができます。本作では、登場人物は非常に多く出てきますし、スウェーデン語なので聞き慣れない名前が多いのですが、その中でもリスベット・サランデルというタトゥーとピアスをたくさん身につけた、一風変わった調査員が主人公を支えます。リスベットは女性で、精神病を疑われており、色々な面でいわれのない差別を受けています。ただし訳ありで調査員としての能力はとて高く、これまでの人生で経験した迫害を乗り越えて、全力で自分の仕事を全うしようとしています。彼女たちの奮闘は、予想をはるかに超えていて、思わず応援したくなります。

スウェーデンというと自然豊かで家庭的、スマートな印象がありますが、作中では凄惨な事件がいくつも紹介されます。この小説を読むと、ナチスの影響で醸成された戦後スウェーデンの暗部が少し学べる気がします。

作者のスティーグ・ラーソンは、当初 10 部作の構想で書き始めていたそうですが、3 作目まで書き終えたところで、1 作目（本作）の発行の直前に、残念ながら病気で亡くなってしまいました。3 作目まではスウェーデンや日本を含め、世界中で大変好評を博していたので、他の作家が遺志を引き継ぎ、4 作目以降も同じシリーズ名で執筆しています。1 作が上下巻で翻訳されているので長いかもしれませんが、ジャーナリストの地道な調査によって謎が解明されていくのは圧巻です。さらに、本作の後も話は続くので 2 作目以降も読んでみてください。

『本物の英語力』 鳥飼玖美子

講談社 2016年

もう 1 冊は私の専門分野に近い内容から紹介します。英語教育や英語学習についてのあれこれを、最近の事例を取り上げながら解説しています。著者の鳥飼玖美子氏は同時通訳者でもあり、また NHK の「ニュースで英会話」という番組に長年携わっていました。そういった事情もあり、本書で取り上げられる英語の具体例も大変リアルなものになっています。

英語に興味のある人は、今後の英語学習のヒントにしてもらいたいと思います。

本書で度々強調されているのは、英語学習で重要なのは「異文化理解」と「英語『で』勉強する」ということです。異文化理解と聞くと、ハロウィーンなど英語圏での文化を思い浮かべることが多いと思いますが、本書では言語も 1 つの文化であると指摘します。英語の文法が日本語と異なるのも文化的背景が異なるからです。そういった、背景を考えながら文法を勉強してみると文法を丸暗記するだけではない英語の面白みに気づくのではないのでしょうか。本書では文法は覚えるのは面倒だが、「英語という言語文化のルール」なのでそれを知ることは英会話でも大いに役立つと述べられています。

次に、英語で勉強するという点です。英語を使えるようになりたいとき、「英語『を』勉強する」のが一般的です。もちろん、それも重要なことではありますが、自分が好き、あるいは得意な分野の内容を、「英語『で』勉強する」ことも有効だと紹介されています。内容は英語で開講されているような経済学関連でも良いでしょうし、自分の趣味に関するものでも良いでしょう。

どちらも厳密に実践するのは難しく感じられるかもしれませんが、本書からヒントを得て自分に合った英語（外国語）学習の方法を見つけてみてください。